

下町人情、心に「泊める」

ゲストハウスあかつき屋代表 堀田哲弘さん(59)



柿渋色の下見板に、はためく白いのれんが映える。入り口の引き戸を開くと、円窓のある畳玄関で、金沢市暁町

のゲストハウス・あかつき屋代表、堀田哲弘さん(59)が宿泊客を出迎えた。「べろべろ買って来た」「銭湯で地元の人に背中を流してもらった」。うれしそうな旅人の声に、堀田さんが温かな表情で応える。

希望とあらば、周辺の商店や名所の案内も買って出る。「せっかく金沢にきたのなら、通り一遍の観光をしてほしくない。気取らない、ほんものの日常を知ってほしいんです」。

2011年1月、ゲストハウスを開業した。金澤町家を活用した小さな宿の草創期だった。

観光地ではないし、駅も、繁華街も近くない。「そんなところで宿が成り立つのか」。厳しい声も聞こえたが、堀田さんにはこの界わいが「宝」に見えた。

1933(昭和8)年築の町家は修理が必要ないほど守られていた。隣家の大工さんがこしらえた、このまち生まれの家だ。

ふすまを開け放つと庭があり、玄関の格子戸を開ければ兼六園を望んで商店が連なる。城のお膝元に広がる下町にはパン屋、魚屋、どじょうのかば焼き屋と、個人商店が幾つも残る。

まちの個性をつくる店々と軒を並べる町家に泊まって、人情を心にとめてもらいたい。思い描いていた理想がぴたりと合った。

開業前、シンクタンクの研究員として県内のどぶろく特区、農家民宿立ち上げなどを支援した。訪れる人が増えれば人々の表情が明るくなる。まちの宝を磨き上げることが、どれほど笑顔を増やすかを身に染みて知っている。

界わいに、自宅も構えた。「このまちの住民として、まちの価値を高めていきたい」。偉そうに聞こえるかも知れませんが、と堀田さんのはにかむ。「愛想よし」がにじむ笑顔で、この町に訪れる人を迎え続ける。



玄関で宿泊者を迎え入れる堀田さん
—金沢市暁町

川上光彦金大名誉教授



識者の

建物正面の瀟洒な小庇など意匠が素晴らしい。国の登録有形文化財に指定されており、金沢で泊まるなら金澤町家がよいと、建築などを専攻する大学教授や学生の利用も多い。こうしたゲストハウスとしての活用は地域にとっても有効な資産となり、金沢の魅力向上につながっている。

◇次回は26日です。